

麻を刈る

泉鏡太郎

青空文庫

めいちじふにさんねんころ
 明治十二年頃の 出 版 だと思ふ——澤村田之助曙双
 うし 紙と云ふ合 巻 ものの、 淡彩の口繪に、 黒縮緬の羽織を
 なでがた 撫肩に引つ掛けて、 出の衣装の袂を取つた、 座敷がへりらし
 い、 微醉の婀娜なのが、 俣の傍にイずんで、 春たけなはに、 夕
 ふげしき 景色。 瓦斯燈がほんのり點れて、 あしらつた 一本の青柳が、
 すそ 裾を曳いて、 姿を競つて居て、 唄が題してあつたのを覚えて居る。
 いは 曰く、 (金子も男も何にも入らぬ微醉機嫌の人力車)——少
 うくまちが 々間違つて居るかも知れないが、 間違つて居れば、 其の藝妓
 こころがけ の心掛で、 私の知つた事ではない。 何しろ然うした意氣が唄
 あるひくるま つてあつた。 或は俣のはやりはじめの頃かも知れない。 微醉を

春の風にそよ／＼吹かせて、身體がスツと柳の枝で宙に靡く心

持は、餘程嬉しかったものと見える。

今時バアで酔拂つて、タクシイに蹠跟け込んで、いや、ど

ツこいと腰を入れると、がた、がたんと揺れるから、脚を臺の如

く踏張つて——上等のは知らない——屋根が低いから屈み腰

に眼を据ゑて、首を虎に振るのは圖が違ふ。第一色氣があつ

て世を憚らず、親不孝を顧みざる輩は、男女で相乗をしたも

のである。敢て註するに及ばないが、俤の上で露呈に丸鬚なり

島田なりと、散切の……悪くすると、揉上の長い奴が、肩を

組んで、でれりとして行く。些と極端にたとへれば、天鷲絨

の寢臺を縦にして、男女が處を、廣告に持歩行いたと大差はな

い。

自動車じどうしゃに相乗あひのりして、堂々だうだうと、浅草あさくさ、上野うへの、銀座ぎんざを飛とばす、當今たうこんの貴婦人きふじん紳士しんしといへど、これを見たら一驚いつきやうを吃きつするであらう。誰もたれ口癖くちぐせに言ふ事ことだが、實じつに時代じだいの推移すゐいである。だが其そのいづれの相乗あひのりにも、齊ひとしく私わたしの關かんせざる事ことは言いふまでもない。とにかく、色氣いろけも聊いさゝか自棄やけで、穩おだかならぬものであつた。

——(すきなお方かたと相乗あひのり人力車じんりきしや、暗くらいとこ曳ひいてくれ、車くるまるまや夫さんつま十錢じっせんはずむ、見みかはす顔かほに、その手てが、おつだね)——

恚いかう云いふ流行はやりうた唄うたさへあつた。おつだね節ふしと名題なだいをあげたほどである。何なんにしろ人力車じんりきしやはすくなからず情事じやうじに交かう渉せふを持もつたに相違さうあひない。

かなざは ひと わだしやうけんしちよ 郷土史談に採録する、石

川縣はけんの開化かいくわ新聞しんぶん、明治五年二月、其の第六號の記事に、

先頃大阪より歸りし人の話はなしに、彼地かのちにては人力車

日を追ひ盛に行はれ、西京さいきやうは近頃までこれなき所、

追々盛さかんにて、四百六輛。伏見ふしみには五十一輛な

りと云ふ。尚ほ追々増加するよし……其處そこで、東京

府下うふかは總數四萬餘に及ぶ。

と記して、一車の税銀ぜいぎん、一ヶ月八匁宛のちもんめづなりと載せてあ

る。勿論、金澤かなざは、福井ふくいなどでは、俵藤太たはらとうだも、頼光らいくわう、瀧

夜叉姫きやしやひめも、まだ見た事こともなかつたらう。此の東京とうきやうの四萬の

數かずは多いやうだけれども、其の頃ころにしる府下ふか一帯いつたいの人口じんこうに較

べては、辻駕籠つじかごほどにも行渡ゆきわたるまい、然しかも一ヶ月税銀いっげつぜいぎん八はち八もん
めの人力車じんりきしやである。なか／＼以もつて平民へいみんには乗のれさうに思おもは
 れぬ。時ときの流行りうかうといへば、別べつして婦人ふじんが見得みえと憧しようけい憬まどの的まとに
 する……的まととなれば、金銀相輝きんぎんあかゞやく。弓ゆみを學まなぶものの、三年凝さんねんぎ
ようしひとみまとの瞳まどには的まとの虱しらみも其その大きおほさ車輪しやりんである。従したがつて、其その頃ころ
 の巷談こうだんには、車夫くるまやの色いろ男をとこが澤山たくさんあつた。一寸ちよつと岡惚をかぼれ
 をされることは、やがて田舎あなまはりの賣藥行商ばいやくぎやうしやう、後のちに自じ動車どう
しやの運轉手うんでんしゆに譲ゆづらない。立志美談車夫りつしびだんしやふの何なんとかがざらにあ
 つた。

しばらくの間あひだに、俵くるまのふえた事ことは夥おびしい。

人力車じんりきしや——腕車わんしやが、此このイんに車べんと成なるつた、字じは紅葉こうえふ先せん

生の創意であると思ふ。見附を入つて、牛込から、飯田町へ曲るあたりの帳場に、（人力）を附着けて、一寸（分）の字の形にしたのに、車をつくり添へて、大きく一字にした横看板を、通りがかりに見て、それを先生に、私が話した事がある。「そいつは可笑しい。一寸使へるな。」と火鉢に頼杖をつかれたのを覚えて居る。

……更めて言ふまでもないが、車賃なしの兵兒帯でも、辻、ちまたさかばまを、巷の盛り場は申すまでもない事、待俤の、旦那御都合で、を切りぬき抜けるのが、てくの身に取り大苦勞で。どやどやどや、がらくと……大袈裟ではない、廣小路なんぞでは一時に十四五臺も取卷いた。三橋、鷹鍋、達磨汁粉、行くさき眞黒に目に

餘る。「こいつを樂に切抜けないぢや東 京に住めないよ。」
と、よく下宿の先輩が然う言つた。

十四五年前、いまの下六番町へ越した頃も、すぐ有島
家の黒塀外に、辻車、いまの文藝春秋社の前の石
垣と、通を隔つた上六の角とに向ひ合ひ、番町學校の角
にも、づらりと出て居て、ものの一二町とはない處に、其のほ
かに尚ほ宿車が三四軒。

——春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、
續いて、秋の新仁和賀には、十分間に車の飛ぶこと、
此の通りのみにて七十五輛。

と、大音寺前の姉さん、一葉女史が、乃ち袖を巻いて拍子を取つた所以である。

——十分間に七十五輛、敢て大音寺前ばかりとは云はない。馬道は俵で填まつた。浅草の方の悉い事は、久保田さ

ん（万ちやん）に聞がが可い。……山の手、本郷臺。……切

通しは堰を切つて俵の瀧を流した。勿論、相乗も渦を巻い

て、人とともに舞つて落ちる、江智勝、豊國あたりで、したゝ

かな勢に成つたのが、ありやく、と俵の上で、蛸の手で踊つて

行く。でつかんしよに、愉快ぶし、妓夫臺談判破裂して——

進めツ——いよう、御壯、どうだい隊長と、喚き合ふ。——

——どうも隊長。……まことに御壯。が、はずんで下りて一

とよど 淀みして、まはるところから、すこいきほひにぶ 少し勢が鈍くなる。知らずや、なかちやう 仲町
 で車夫が、わかいしゆ こあたりに當るのである。「澄まねえがね、だんなはなはだ 旦那。」甚
 しきは楫を留める。あすこ 彼處を抜けると、ひろこうぢ 廣小路の角の大時計と、
まつげん 松源の屋根飾を派手に見せて、また 又は始める。「ほんの蠟燭
 だ、だんな。」さて、もつと なんば 最も難場としたのは、やました 山下の踏切の處が、
ひととさかすべ 一坂上らうとする勢を、いきほひ わざ せんろ 故と線路で沮めて、ゆつくりと強請り
 かゝる。ところ から 處を、辛うじて切抜けると、みしまさま 三島様の曲角で、また
 はじめて、いのや おほいけ みぎ 入谷の大池を右に、くつと暗くなるあたりから、し
だい すご な 第に凄く成つたものだ——と聞きく。
 ……實は聞いただけで。わたし おぼ 私の覺えたのは……そんな、そ、そん
 な怪けしからん場所ばしよではない。國くにへ往復ゆきかへりの野路山道のみちやまみちと、市中しちゆう

も、山まはりの神社佛閣ばかり。だが一寸こゝに自讃した
 い事がある。酒は熱爛のぐい呷り、雲助の風に似て、茶は番
 茶のがぶ飲み。料理の食べ方を心得ず。お茶碗の三葉は生
 煮えらしいから、そつと片寄せて、山葵を生きもののやうに可
 恐がるのだから、われながらお座がさめる。さゝ身の煮くたら
 しを、ほうくと吹いてうまがつて、焼豆腐ばかりを手元へ取
 込み、割前の時は、鍋の中の領分を、片隅へ、群雄
 割據の地圖の如く割つて、眞中へ埋た臍もつを、箸の尖で穴
 をあけて、火はよく通つたでござらうかと、遠目金を覗くやう
 な形をしたのでは大概岡惚も引退る。……友だちは、反
 感と輕侮を持つ。精々同情のあるのが苦笑する。と云

つた次第しだいだが……たゞ俵くるまに掛かけては乗り方のがうまい、と——最ももつと御容ごようす子すではない——曳ひいてる車夫わかいしゆに讚ほめられた。拾ひろひ乗のりだと、樹きの下した、堀へいつづ續づきなぞで、わぎ／＼振ふりむ向むいて然さう言いつた事ことさへある。

乗のるのがうまいと言いふ下したから、落おちることもよく落おちた。本ほんが

郷うの菊きく坂ざかの途とちう中ちゆうで徐やはく々よくと横よこに落おちたが寺てらの生い垣げに引ひ掛か

つた、怪け我がなし。神田かんだ猿だ樂さる町がくちやうで、幌ほろのまゝ打ぶ倒たれた、又またツ

と這は出ひる事ことは出でたが、氣きつけの寶ほう丹たんをか買かふつもりで藥くすり屋やと間ま

違ちがへて汁粉屋しるこやへ入ひつた、大分だいぶん茫ぼうとしたに違ちがひない、が怪け我がなし。

眞ま夏なつ、三宅みやけ坂ざかをぐん／＼上あらうとして、車夫わかいしゆが膝ひざをトつンと支つく

と蹴け込こみを込すべつて、ハツと思おもふ拍ひやう子しに、車夫わかいしゆの背せ中なかを跨またいで馬う

乗りに留まつて「怪我をしないかね。」は出来が可い。師走の算
 段に驅けつて五味坂で投出された、此の時は、懐中げつ
 そりと寒うして、心、虚なるが故に、路端の石に打撞かつて足
 の指に怪我をした。最近は……尤も震災前だが……土橋のガ
 ード下を護謨輪で颯と言ふうちに、アツと思ふと私はポンと俥の
 外へ眞直に立つて、車夫は諸膝で、のめつて居た。蓋し、期
 せずして、一つ宙返りをして車夫の頭を乗越したのである。拂
 ふほど砂もつかない、が、此れは後で悚然とした。……實の處今
 でもまだ吃驚してゐる。

要するに——俥は落ちるものと心得て乗るのである。而して、
 悪道路と、坂の上下は、必ず下りて歩行く事——

これ、當流たうりうの奥儀おくぎである、と何も矢場七やばしち、土場六どばろくが、茄子なすびのトントンを密造みつぎょうする時のやうに祕傳ひでんがるには及ばない。——實じつは、故郷こきやうへの往復わうふくに、其そこの頃は交通かうつうの必要ひつえう上止むを得ずえいくど長途ながみちを俚くるまにたよつたため、何時いつとなく乗のるのに馴なれたものであらうと思ふおも。……

汽車きしやは、米原まいばらを接續線せつぞくせんにして、それが敦賀つるがまでしか通つうじては居ゐなかつた。「むき蟹かに。」「殻附からつき。」などと銀座ぎんざのはち巻まきで旨うまがる處どころか、ヤターいちちでも越前蟹えちぜんかに（大蟹おほかに）を逃あつちへる……わづかじふねん十年まへばかり前までは、曾席くわいせきの膳ぜんに恭やうやくしく袴はかまつきで罷まかり出たのを、今いまから見れば、嘘うそのやうだ。けれども、北陸線ほくりくせんの通つうじなかつた時分じぶん、舊道きうだうは平家物語へいけものがたり、太平記たいへいき、太閤記たいかふきに至いたる

まで、名だたる荒地山、歸、虎杖坂、中河内、燧ヶ嶽。――

――新道は春日野峠、大良、大日枝の絶所で、其の敦賀金ヶ

崎まで、これを金澤から辿つて三十八里である。蟹が歩行け

ば三年かゝる。

最も、加州金石から――蓮如上人縁起のうち、嫁おどし

の道場、吉崎の港、小女郎の三國へ寄つて、金ヶ崎へ通

ふ百噸以下の汽船はあつた。が、事もおろかや如法の荒

海、剩へ北國日和と、諺にさへ言ふのだから、浪はいつも穩

かでない。敦賀は良津ゆる苦勞はないが、金石の方は船が

沖がかりして、波の立つ時は、端舟で二三里も揉まれなければ成

らぬ。此だけでも命がけだ。冬分は往々敦賀から來た船が、

そこ
其處にかないは金石のみを見ながら、はしけ端舟べんの便がないために、いつか五日なぬか、なぬか七日も
漾たゞよひつゝ、はて果はさど佐渡しまヶ島へふきはな吹放たれたり、おもひき思切つて、もとの
敦賀へぎやくもど逆戻りする事ことさへあつた。

じやうきやう

上京するのひとに、もう一つの方法しかたは、かなぎは金澤じふさんりから十三里、

越中ゑつちう伏木港ふしきかうまでりくろ陸路、但したゞ俱利伽羅けんの嶮ここを越す——其その伏

木港かうからなほえつ直江津なほえつまできせん汽船があつて、てつだうすぐに鐵道へつゞ續いたが、

まを申すまでもない、おやしらず親不知こしららず、おき子不知わたの沖を渡る。……此この航路かうろも、

なんぎおなじやうに難儀であつた。もしこれをりく陸にしようか。約六十

里あまに餘つてとほ遠い。肝心かんじんな事ことは、ろぎん路銀たかが高値い。

其處そこで、しよちうきやうか暑中休暇かくせいの學生ひだごえたちは、まつもとむしろ飛驒越まつもとで松本へ

嶮けんをかを冒したり、白山はくさんを裏うらづたひに、夜叉やしやヶ池いけの奥おくを美濃路みのぢへ渡わた
 つたり、中なかには佐々さつさ成なり政まさのさらく越ごえを尋たづねた偉えらいのさへ
 ある。……現げんに、廣島ひろしま師範しはんの閣下かくかほ穂科ほしなり信良しんりやうは——こゝに校か
 長うちやうたる其その威嚴ゐげんを傷きずつけず禮れいを失しつしない程度ていどで、祝意しゆくいに少すこ
 し擲揄やゆを含ふくめた一句いっくがある。本來ほんらいなら、別行べつきやうに認しためて、大おほい
 に俳面はいめんを保たもつべきだが、惡口わるくちの意地いちぢの惡わるいのがぢき近所きんじよに
 居ゐるから、謙遜けんそんして、二十字にじふじづめの中なかへ、十七字じふしちじを割込わりこませ
 る。曰いはく、千兩せんりやうの大禮服たいれいふくや土用干どようぼし。——或あるは曰いはく——禮れ
 服いふくや一千兩いつせんりやうを土用干どようぼし——此この大禮服たいれいふくは東京とうきやうで出來でき
 た。が、帽ぼうを頂いたぎ、劍けんを帶おび、手套てぶくろを絞しぼると、坐すわるのが變へんだ。
 床几しやうぎ——といふ處ところだが、(——親類しんるゐの家いへで——)其その用意よういが

ないから、踏臺ふみだいに鬼くわい然ぜんとして腰こしを掛かけた……んぢや、と笑わらつて、當人たうにんが私わたしに話はなした。夫人ふじん、及びおよ學生がくせいさん方がたには内ないしよ證うらしい。——その學生がくせいの頃ころから、閣下かくかは學問がくもんも腹はらも出來できて居あて、私わたしのやうに卑怯ひけふでないから、泳およぎに達たつしては居あないけれども、北海ほくかいの荒浪あらなみの百噸ひやくとん以下いかを恐おそれない。恐おそれはしないが、不思議ふしぎに船暈ふなよひが人ひとより激はげしい。一度いちどは、餘りあまの苦くるしさに、三國みくに沿岸えんがんで……身みを投なげて……いや、此これだと女性ぢよせいに近ちかい、いきなり飛込とびこんで死しなうと思おもつた、と言いふほどであるから、一夏ひとなつは一人旅ひとりたびで、山神さんじんを驚おどろかし、蛇へびを踏ふんで、今いまも人ひとの恐おそるゝ、名代なだいの天生峠あまふたうげを越こして、あゝ降ふつたる雪ゆきかな、と山蛭やまひるを袖そでで拂はらつて、美人びじんの孤家ひとつやに宿やどつた事ことがある。首尾しゆびよく岐阜ぎふへ越こした

のであつた。

道は違ふが——話の次でだ。私も下街道を、唯一度だけ、伏

木から直江津まで汽船で渡つた事がある。——後にも言ふが——

いつもは件の得意の俵で、上街道越前を敦賀へ出たのに——

そのとき爾時は、旅費の都合で。……聞いて、眞實にはなさるまい、

伏木の汽船が、兩會社で激しく競争して、乗客争

奪の手段のあまり、無賃銀、たゞでのせて、甲會社は

手拭を一筋、乙會社は繪端書三枚を景物に出すと言

ふ。……船中にて然やうな事は申さぬものだが、龍宮場末の

活動寫眞が宣傳をするやうな風説を聞いて、乗らざるべ

けんやと、旅費の苦しいのが二人づれで驅出した。

この侶つれ伴はは、後のちの校かうちやうかくか長やうかくか閣かく下かの事ことではない。おなじく大だい學がく

 の學がく生せいで暑しよちうきうか中ちゆう休きゆう暇かに歸きせい省せいして、糠こぬかにしん 鯿やす

 つて、舌したをしたピリ、と刺しげき戟きする、糠ぬかに漬つけ込こんだ鯿にしん

 のと一いつしよ所しょに、金かなざは澤はを立たつて、徒とほ歩ほで、森もりもと下もと、津づはた幡た、石いするぎ動どう。

……それよりして、俱くり利から伽か羅らに掛かる、新しん道だう天あまた田た越ごえの峠たうげで、力ち

 からもち 餅もちを……食たべたかつたが澁しぶちや茶ちやばかり。はツくと漸やつと越こし

て、漫まん々くたる大おほきな川かはの——それは庄しやう川かはであらうと思おもふ—

| 橋はしで、がつかりして弱よわつて居ゐた處ところを、船せん頭とうに半なか好げう意いで乗のせら

れて、流ながれくだりに伏ふし木きへ渡わたつた。様やう子すを聞きくと、汽き船せん會わい社しゃ

 の無たゞ錢なで景けい物ぶつは、裏うら切ぎられた。何どうも眞ほん個たうではないらしいの

に、がつかりしたが、此の時の景色は忘れない。船が下流に落ちると、暮雲岸を籠めて水天一色、江波渺茫、遠く蘆が靡けば、戀々として鷺が佇み、近く波が動けば、ア、鱸か？ 鵜が躍つた。船頭が辨當を使ふ間、しばらくは船は漂蕩と其の流るゝに任せて、やがて、餉を澄まして、ざぶりと舷に洗ひ状に、割籠に掬むとて掻く水が、船脚よりは長く尾を曳いて、動くもののない江の面に、其船頭は悠然として、片手で艫を繰りはじめながら、片手で其の水を飲む時、白鷺の一羽が舞ひながら下りて、舳に留まつたのである。

いや、そんな事より、力餅さへ食はぬ二人が、辨當のうまさうなのに、ごくりと一所に唾をのんでお腹が空いて堪らな

い。……船頭の菜も糠 鯨で。……

これには鰯もある——糠 鰯、且つ恐るべきものに河豚さへ

ある。這個糠漬の大河豚。

何と、此の糠河豚を、紅葉先生に土産に呈した男がある。

たべものに掛けては、中華亭の娘が運ぶ新栗のきんとんから、

町内の車夫が内職の駄菓子店の鐵砲玉まで、趣を解し

ないでは置かない方だから、遅い朝御飯に茶漬けで、さらく。

しばらくすると、玄關の襖が、いつになく、妙に靜に開いて、

懐手で少し鬱した先生が、

「泉」

「は。」

「あの、河豚は、お前も食つたか。」

「故郷では、惣菜にしますんです。」

「おいら、少し腹が疼むんだがな。」

「先生、河豚に中害つて、疼む事はないんださうです。」

「あゝ、然うか。」

「すつと、其のまゝ二階へ、——」

いま、我が瀧太郎さんは、目まじろがず、一段と目玉を大

きくして、然も糠にぶくくと熟れて甘い河豚を食ふから驚く。

新婚當時、四五年故郷を省みなかつた時分、穂科閣下は、

あゝ糠 鯁が食ひたいな、と暫々言つて繰返した。

「食はれるものかね。」

「いや、然うでない、あれは珍味ぢやぞ。」

その後歸省して、新保村から歸つて、

「食つたよ。——食つたがね、……何うも何ぢや、思つたほどで

なかつたよ。」

然うだらう。日本橋の砂糖問屋の令嬢が、圓鬻に結つ

て、あなたや……鱻の新ぎれと、夜行の鮭を教へたのである。糠

ぬかにしん 鱧 がうまいものか。

さて、其の晩は伏木へ泊つた。

夜食の膳で「あゝあ、何だい此れは？」給仕に居てくれた島

田鬻の女中さんが、「鯰ですの。」鯰の魚軒、冷たい綿屑を

頬張つた。勿論、宿錢は廉い。いや、羹も食はず、鯰を吐いた。洒落ではなしに驚いた。港を前に鯰の皿、うらなつて思ふに、しけだなあ。——風の模様は……まあ何だらうと、此弱蟲が悄悄と、少々ぐらつく欄干に凭りかゝると、島田がすつと立つて……九月初旬でまだ浴衣だつた、袖を掻い込むで、白い手を海の上へさしのべた。手の半帕が屋根を斜に、山の端へかゝつて颯と靡いた。「此の模様では大丈夫です。」私は嬉しかつた。

おなじ半帕でも、金澤の貸本屋の若妻と云ふのが、店の口の暖簾を肩で分けた半身で、でれりと坐つて、いつも半帕を口に啣へて、うつむいて見せた圖は、永洗の口繪の艶冶

の態を眞似て、大に非なるものであつたが、これは期せずして年
 方しかたの挿繪さしゑの清楚せいそであつた。

ところで汽船は——うそだの、裏切つたのと、生意氣な事を言ふな。

直江津まで、一人前九錢也。……明治二十六年頃の事

とこそいへ、それで、午餉の辨當をくれたのである。器はたと

へ、蓋なしの鉢力で、石炭臭い菜が、車麩の煮たの三切にし

て、「おい來た。まだ、そつちにもか——そら來た。」で、帆木

綿の幕の下に、ごろくした連中へ配つたにせよ。

日一杯……無事に直江津へ上陸したが、時間によつて汽

車は長野で留まつた。扇屋だつたか、藤屋だつたか、土地も星

も暗かつた。よく覺えては居ないが、玄關へ掛ると、出迎へ

た……お太鼓に結んだ女中が跪いて——ヌイと突出した大學生の靴を脱がしたが、べこぼこんと弛んで、其癖、硬いのがごそりと脱げると……靴下ならまだ可い「何、體裁なんぞ、そんな事。」邊幅を修しない男だから、紺足袋で、おや指の尖に大きな穴のあいたのが、油蟲を挟んだ如く顯はれた。……渠は金釦の制服だし、此方は袴なしの烏打だから、女中も一向に構はなかつたが、いや、何しても、靴は羊皮の上等品でも自分で脱ぐ方が可ささうである。少し氣障だが、色氣があるのか、人事ながら、私は恥ぢた。

……思ひ出す事がある。淺草田原町の裏長屋に轉がつて居た時、春寒い頃……足袋がない。……最も寒中もなかつた

らしいが、何うも陽氣に向つて、何分か色氣づいたと見える。
 足袋なしでは仲見世へ出掛け憎い。押入でふと見附けた。裏
 長屋のあるじと言ふのが醫學生で、内證で怪い脈を取つ
 たから、白足袋を用ゐる、その薄汚れたのが、片方、然も大
 ほをとこ
 男のだから私の足なんぞ二つ入る。細君に内證で、左
 へ穿いた——で仲見世へ。……晝間出掛けられますか。夜を待つ
 て路次を出て、觀世音へ參詣した。御利益で、怪我もしない
 で御堂から裏の方へうかくとつて、象と野兎が歩行ツくら
 と云ふ珍な形で行くと、忽ち灯のちらつく暗がりに、眞白な顔
 と、青い半襟が爾側から、
 「ちよいと、ちよいと、ちよいと、ちよいと。」

「白足袋の兄さん、ちよいと。」

わたしは冷汗を流して、一生足袋を断たうと思つた。

後に——丸山福山町に、はじめに一葉女史を訪ねた歸

りに、襟つき、銀杏返し、前垂掛と云ふ姿に、部屋を送ら

れて出ると、勝手元から、島田の十八九、色白で、脊のすら

りとした、これぞ——つい此の間なく成つた——妹のお邦さん、

はらくと出て、

「お麓末様。」

と、手をつかれた時は、足が縮んだ。其の下駄を穿かうとする、

足袋の尖に大きな穴があつたのである。

衣類より足袋は目に着く。江戸では女が素足であつた。其のし

なやかさと、柔かさと、形かたちの好よさを、春はる信のぶ、哥うた磨まろ、誰たれ々の
 繪ゑにも見みるが可いい。就な中かんづく、意いき氣きな向むきは湯ゆ上ありの足あしを、出でしな
 に、もう一いちど度あつ熱あつい湯ゆに浸ひたしてぐいと拭ふき上あげて、雪ゆきにうつすりと
 も、いろつま 桃もも色いろした爪つまさきに下げ駄たを引ひ掛つかけたと言いふ。モダンの淑しゆく女ぢよ：
 …きものは不ふ断だん着ぎでも、足た袋びは黄き色いろく汚よごれない、だぶくししない
 皺しわの寄よらないのにしてほしい。練ねり出だす時ときの事ことである。働はたらくと言いへ
 ば、説せつが違ちがふ。眞ま黒つだつて破やぶれて居ゐたつて、煤すす拂はらひ、大おほ掃さう
 除ぢには構かまふものか、これもみぐるしからぬもの、塵ちり塚づかの塵ちりで
 ある。

—時ときに、長なが野の泊どまりの其その翌よく日じつ、上う野へついで、連つれとは本ほ
 郷んがうで分わかれて、私わたしは牛うし込ごめの先せん生せいの玄げん關くわんに歸かへつた。其その年とし

父をなくした爲めに、多日、横寺町の玄關を離れて居たのであつた。駈け込むやうに、門外の柳を潜つて、格子戸の前の梅を覗くと、二疊に一人机を控へてた書生が居て、はじめて逢つた、春葉である。十七だから、髯なんか生やさない、五分刈の長い顔で、仰向いた。

「先生……奥さんは……唯今、歸りました。」

「あゝ、泉君ですか……先生からうかゞつて存じて居ります。何うも然うらしいと思ひました。僕は柳川と云ふものです。此頃から參つて居ります。」

「や、ようこそ、……何うぞ。」

慇懃で、なかが可い。これから秋冷相催すと、次第に、

焼芋やきいもの買かひツこ、煙草たばこの割わり前まへで睨にらみ合あつて喧嘩けんくわをするのだ
 が、——此この一篇いつぺんには預あづかる方ほうが至したう當たうらしい。

處ところで——父ちちの……危き篤とく……生しやう涯がい一いち大だい事じの電報でんぱうで、其その

年とし一いち月げつ、節せついまだ大寒たいかんに、故郷こきやうへ駈かけ戻もどつた折をりは、汽車きしや

で夜よをあかして、敦賀つるがから、俣くるまだつたが、武生たけふまでで日ひが暮くれた。

道みち十一里じふいちりだけれども、山坂やまさかばかりだから撈取はかどらない。其その昔むかし、

前田利家まへだとしいへ、在城ざいじやうの地ち、武生たけふは柳やなぎと水みづと女をんなの綺麗きれいな府中ふちゆうであ

る。

佐久間玄蕃さくまげんばが中入なかいりの懈怠けたいのためか、柴田勝家しばたかついへ、賤しづヶ嶽たけの合か

戦敗つせんやぶれて、此この城じやうちゆう中ちゆうに一息ひといきし湯漬ゆづけを所望しよまうして、悄然せうぜん

と北きたの莊さうへと落おちて行ゆく。ほどもあらせず、勝かちに乗のつたる秀ひ吉でよし
 が一いつ騎つき驅がけに馬うまを寄よせると、腰こしより采さいを抜ぬき出いし、さらりと振ふつ
 て、此これは筑ちく前ぜん守のかみぞや、又また左ざ、又また左ざ、鐵てつ砲ぱう打うつなど、大お手ほて
 の城じやう門もんを開ひらかせた、大たい閣かふ大だい得とく意いの場ばし所よだが、そんな夢ゆめも
 見みず、悶もだえ明あかした。翌よく朝てうまだ薄うす暗くらかつたが、七しち時じに乗のつた
 俚くるまが、はずむ酒さか手てもなかつたのに、其その日ひの午ご後ご九く時じと云いふのに、
 金かな澤ざの町まち外はづれの茶ちや店みせへ着ついた。屈くつき竟やうな若わかい男をとこと云いふで
 もなく年ねん配ばいの車くるま夫まやである。一ちよつ寸と話わだ題だいには成ならうと思おもふ、武た
 生けふから其その道みち程のり、實じつに二十にじふ七しち里りである。——深ふか川がの俚くるまは永えい
 代いを越こさないのを他たに見み得えにする……と云いつたもので、上う澄はづみ
 のいゝ處ところを吸すつて滓かすを讓ゆづる。客きやくから極きめて取とつた賃ちん銀ぎんを頭あたまでつ

かちに掴つかんで尻しりつこけに仲間なかまに落おとすのである。そんな辣腕らつわんと質たち
 は違ちがつても、都合つがふじやう上、勝手かたてよろしき處ところで俵たわらを替かへるのが道中だうちゆう
 の習慣ならはしで、出發しゆうつぱつてん點てんで、通とほし、と極きめても、そんな約束やくそくは
 とほ通とほさない。が、親切しんせつな車夫くるまやは、その信しんずるものに會あつて、頼たの
 まれた客きやくを渡わたすまでは、建場たてば々々々々を、幾度いくたか物色ぶつしよくするのが好か
 意ういであつた。で、十里じふりじふごり十五里じふごりは大抵たいてい曳ひく。廿七里にじふしちりを日ひのうち
 に突つつ切きつたのには始はじめて出逢であつた。……
 不しのぼず忍いけの池いけで懸けん賞しやうづきの不ふ思し議ぎな競きやう争さうがあつて、満都まんと
 を騒さわがせた事ことがある。彼の池いけは内端うちわにまはつて、一周ひとまはり圍い一里いちり強きやう
 だと言いふ。彼の池いけを、朝あさの間まから日没にっぽつまで、步調ほてうの遲速ちそくは論ろんぜ
 ぬ、大略おほよそ十五時間じふごじかんの間に、幾いくまりか、其その回くわい數すうの多おほいの

を以て勝利とする。……間違つたら、許しツこ、たしか、當、時
 事新報の催しであつたと思ふ。……二人ともまだ玄關に居
 たが、こんな事は大好きだから柳川が見物、參觀か、參
 観した。「三人ばかり倒れて寝たよ、驅出すのなんざ一人
 も居ない、……皆な恚う腕を組んで、のそりくと草を踏んで歩
 行いて居たがね、あの草を踏むのが祕傳ださうだよ、中にはぐつ
 たりと首を垂れて何とも分別に餘つたと云ふ顔をして居たのが
 あります。見物は山も町も一杯さ。けれども、何の機掛も
 なしに、てくりくだから、見て居て變な氣がした。——眞晝
 間、憑ものがしたか、魅されてでも居るやうで、そのね、鬱ぎ
 込んだ男なんざ、少々氣味が悪かつた。何しろ皆顔色が眞つ

蒼さです」——此時このとき、選手せんしゆ第一だいいちの賞しやうを得たのは、池いけをめぐる
 こと三十幾回さんじふいくくわい、翌日よくじつ發表はつぱうされて、年としは六十に餘る、此この
 老神行太保らうしんぎやうたいほたいそう戴宗たいそうは、加州小松かしようこまつの住人ぢうにん、もとの加賀藩かがはんの飛
 脚ひきやであつた。

頃このごろ日聞きく——當時たうじ、唯一ゆいいつの交通機關かうつうきくわん、江戸三度えどさんどと稱となへた
 加賀藩かがはんの飛脚ひきやくの規定さだめは、高岡たかをか、富山とやま、泊とまり、親不知おやしらず、五智ごち、
 たかだ、ながの、うすひたうげ、高田たかだ、長野ながの、碓氷峠うすひたうげを越えて、松井田まつゐだ、高崎たかさき、江戸えどの板橋いたばし
 まで下街道しもかいだう、百二十里半ひやくにしじふりはん——丁數ちやうすう四千三十八を、早飛はやびき
 脚やくは満五日まんいつか、冬の短日ふゆたんじつに於ておいさへこれくはに加くはふること僅わづかに一いち
 日二時じつにときであつた。常飛脚じやうひきやくの夏なつ（三月さんぐわつより九月くぐわつまで）

とをか 十日——満八日、冬（十月より二月まで）の 十二日
 まんとをか 満十日を別として、其の早の方は一日二十五里が家業だと
 いふ。家業を奮發すれば、あと三里五里は走れようが、それに
 しても、不忍池の三十幾回——況んや二十七里を日づけの
 くるまや 車夫は豪傑であつた。乗つたものに徳はない。が、殆ど奇蹟
 と言はねばならない。

が、其の顔も覺えず、惜むらくは苗も聞かなかつたのは、父の
 なくなつた爲めに血迷つたばかりでない。幾度か越前街道の
 ゆきき 往來に馴れて、賃さへあれば、俵はひとりで驅出すものと心得
 て居たからである。しかし、此の上下には、また随分難儀も
 した。

炎えんてん天の海は鉛うみなまりを溶かして、とろくと瞳ひとみを射る。風かぜは、そよとも吹ふかない。斷崖だんがいの巖いはは鹽しほを削けつつて舌したを刺さす。山やまには木きの葉はの影かげもない。草くさいきれは幻まぼろの煙けむりを噴ふく。八月はちぐわつ上旬じやうじゆん……火ひの敦賀灣つるがわん、眞上まうへの磯かうかくたる岨道そばみちを、俾くるまで大日おほひだ枝山だやまを攀よぢたのであつた。……

上じやうきやう京きやうして、はじめの歸省きせいで、それが病氣びやうきのためであつた。其頃そのころ、學生がくせいの肺病はいびやうは娘むすめに持もてた。書生しよせいの脚氣かつけは年増としまにも向むかない。今いま以もつて向むきも持もてもしないだらうから、御婦人ごふじん方には内證ないしやうだが、實じつは脚氣かつけで。……然しかも大分だいぶん手重ておもかつた。重おもいほど、ぶくくとむくんだのではない、が、乾性かんせいと稱しょうして、その、瘦やせる方が却はうかて質ちが悪わるい。

おひる 午飯に、けんちんを食べて吐いた。——夏の事だし、先生の
 令夫人が心配をなすつて、お實家方がお醫師だから、玉章を
 頂いて出向くと、診察して、打傾いて、又一封の返信
 を授けられた。寸刻も早く轉地を、と言ふのだつたさうである。
 わたし 私は、今もつて、決してけんちんを食はない。江戸時代の草紙の
 なか 裡に、松もどきと云ふ料理がある。たづぬるに精しからず、宿
 題 にした處、近頃神田で育つた或婦が教へた。茄子と茗
 うが 荷と、油揚を清汁にして、薄葛を掛ける。至極經濟な惣
 うざい 菜ださうである。聊かけんちんに似て居るから、それさへも遠
 おもんばか く慮る。

おもゆ 重湯か、
 うすがゆ あるひ 薄粥、
 或は 麺麭を
 せうりやう 少量
 と言はれたけれども、
 き 汽
 車で、そんなものは得られなかつた。
 のりとほ 乗通しは危険だから。
 ……
 まいばら とま 米原で泊つたが、
 はおり き 羽織も着ない
 せうねん 少年には、
 かゆ に 粥は煮てく
 れぬ。其の夜から翌日。——
 くるま ひざか のりだ
 いま、俥で日盛りを乗出すまで、殆ど口にしたものはない。
 ちよくしや ひか
 直射する日の光りに、俥は坂に惱んで幌を掛けぬ。洋傘を
 も 持たない。身の楯は冬の鳥打帽ばかりである。私は肩で呼吸を
 あへ あまつさたど むか だいら たけ みねうら
 喘いだ。剩へ辿り向ふ大良ヶ嶽の峰裏は——此方に蛾ほどの雲
 おほなみ ごとくも みね まつくろ
 なきにかゝはらず、巨濤の如き雲の峰が眞黒に立つて、怨
 やう くはがた さしのぞ
 靈の鋏形の差覗いては消えるやうな電
 いなびかり やま はくう
 光が山の端に空
 き 切つた。——
 どうき をど
 動悸は躍つて、
 しんざう
 心臓は裂けむとする。

わたしは、先生が夏の嘉例として下すつた、水色の絹べりを取
 た、はい原製の涼しい扇子を、膝を緊めて、胸に確と取つて車
 上に居直つた。而して題を採つて極暑の一文を心に案じ
 た。咄！ 心頭を滅却すれば何とかで、悟れば悟れるのだ
 さうだけれど、暑いから暑い。悟ることなんぞは今もつて大嫌
 ひだ。……

なんぢんゐん 汝炎威と戦へ、海も山も草も石も白熱して、汝が眼眩
 まんとす。起て、其の瘦躯をかつて、袖を翳して病魔
 に楯せよ。隻手を拂つて火の箭を斬れ。戦ひは弱し。
 脚はふるふとも、心は空を馳よ。然らずんば……

などと、いや何うも氣恥かしいが、其處で倒れまいと、一生

懸命うけんめいに推敲するかうした。このために、炎天えんてんに一滴いつてきの汗あせも出でなかつたのは、敢あへて歌うたの雨乞あまごひの奇特きどくではない。病やめる青草あをくさの萎なえむとして水みづの涸かわいたのであつた。

けれども、冬ふゆの鳥打帽とりうちぼうを被かむつた久留米くろめがすり緋こぞうの小僧こぞうの、四顧しこひとか人ひと影げなき日盛ひざかりを、一人ひとり雲くもの峰みねに抗かうして行く其その勇氣ゆうきは、今いまも愛あいする。

こゝろそら 心こゝろは空そらを馳はせよ。然しからずんば——苦くるしいから、繰くり返かへして、
 なんぢんる たゝか 汝なんぢ炎威えんいと戦たたかへ。海うみも山やまも、草くさも石いしも白熱はくねつして汝なんぢが眼眩あやま
 汝なんぢ炎威えんいと戦たたかへ。海うみも山やまも、草くさも石いしも白熱はくねつして汝なんぢが眼眩あやま
 まんとす。起たて……

うゝ、と意氣いき込ごむと、車夫くるまやが流ながるゝ汗あせの額ひたひを振ふるつて、
 「あんたも暑あつからうなあ——や、青あをい顔かほをして！……も些ちよツとで

茶屋があるで、水など飲まつせえ。」

水を……水をと唯云つたのに、山蔭に怪しき伏屋の茶店の、

若き女房は、優しく砂糖を入れて硝子盃を與へた。薬師の化

身の様に思ふ。人の情は、時に、あはれなる旅人に恵まるゝ。

若いものは活返つた。

僥倖に雷は聞こえなかつた。可恐い夕立雲は、俥の行くに

つれて、峠をむかう下りに白刃を北に返した電光とともに麓へ崩

れて走つたが、たそがれの大良の茶屋の蚊柱は凄じかつた。片

山家は灯の遅い縁柱の暗中に、刺しに刺して、悶えて揮

ふ腕からは、血が垂れた。其の惱ましさを、崖の瀧のやうな紫陽

さるあをくさむらなか
 花の青い叢の中に突つ込むで身を冷しつゝ、且つもの狂はしく其
 の大輪の藍を抱いて、恰も我を離脱せむとする魂を引緊むる思
 ひをした。……紫陽花の水のやうな香を知つた。——一夕立し
 て過ぎながら、峠には水がなかつたのである。

やがて、星の下を雨とともに流れの走る、武生の宿に着いたの

であつた。

ひとやど

ひとやど

一宿り。一宿りして、こゝを、又こゝから立つて、大雪

なかつるが

こと

くるま

くるまや

あき

の中を敦賀へ越した事もある。俣はきかない。俣夫が朝まだき

ちやうちん

みちあんない

むら

ふりつも

おほたけやぶ

提灯で道案内に立つた。村へ掛ると、降積つた大竹藪

ゆみなり

あつ

まつしろ

トンネル

くゞときすゞめ

を弓形に壓したので、眞白な隧道を潜る時、雀が、ばら／

ちどり

りやうほう

とびかは

こみの

みだ

そつばさ

あゐ

もえぎ

と千鳥に兩方へ飛交して小蓑を亂す其の翼に、藍と萌黄

くれなるゝおぼろらふそくみだ
 と紅の、朧に蠟燭に亂れたのは、鶺鴒、山雀、鸞、目白鳥などの
 かりねぐらおどろ
 假の罫を驚いて起つのであつた。

たうげのぼ
 峠に上つて、案内に分れた。前途は唯一條、峰も谷も、白
 き宇宙を細く縫ふ、それさへまた降りしきる雪に、見るく、歩
 ひとあし
 一歩に埋もれ行く。

まと
 絡つた毛布も白く成つた、人は冷たい粉蝶と成つて消えむと
 する。

むかし快菴禪師と云ふ大徳の聖おはしましけり。
 わかき
 總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲

水にまかせ給ふ……

ほとん
 殆ど暗誦した雨月物語の青頭巾の全章を、雪にむ

せつゝ高らかに朗讀した。

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿なほし、作生何

所爲ぞと一喝して、他が頭を撃たまへば、たちまち

氷の朝日に逢ふが如く消え失せて、かの青頭巾と骨の

みぞ草葉にとゞまりける。

あたりは蝙蝠傘を引つ擔いで、や聲を掛けて、巴を、

薙立て薙立て驅出した。三里の山道、谷間の唯破家の屋根の

み、鷺の片翼折伏した状なのを見たばかり、人らしいものの

影もなかつたのである。二つめの峠、大良からは、岨道の一

方が海に吹放たれるので雪が薄い。俵は敦賀まで、漸と通じ

た。

此の街道の幾返。さもあらばあれ、苦しい思ひばかりは

せぬ。

紺青の海、千仞の底よりして虹を縦に織つて投げると、

玉の走る音を立てて、俤に、道に、さらくと紅を掛けて敷く木

の葉の、一つく其のまゝに海の影を尚ほ映して、尾花、枯菝

も青い。月ならぬ眞晝の緋葉を潜つて、仰げば同じ姿に、遠く高

き峰の緋葉は蒼空を舞つて海に散る……

を鹿なく此の山里と詠じけむ嵯峨のあたりの秋の頃――

―峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、覺束なく

思ひ、駒を早めて行くほどに――

カーン、カーンと鉦の音が細く響く。塚の森の榎の根に、線

香の煙淡く立ち、苔の石の祠には燈心が暗く灯れ、鉦は更に
 飮して、老たるは踞り、幼きたちは立ち集ふ、山の峽なる境の地
 藏のわきには、女を前に抱いて、あからさまに襟を捜る若い男。
 ト板橋の欄干に俯向いて尺八を吹く一人も見た。
 天上か、奈落か、山懷の大釜を其のまゝに、凄いほ
 ど色白な婦の行水する姿も見た。

「書生さん、東京へ連れてつて——」
 赤い襷の手を空ざまに、若苗を俵に投げて、高く笑つた娘も
 ある。……

おもしろいぞえ、京へ參る道は、上る衆もある下向もあ

る。

なんたくもなきが、松並木、間の宿々、山坂掛け、道

中の風情見る如し。——これは能登、越中、加賀よりして、

本願寺まゐりの夥多の信徒たちが、其の頃殆ど色絲を織るが

如く、越前——上街道を往來した趣である。

晴、曇、又月となり、風となり——雪には途絶える——此の往

來のなかを、がたく俣も、車上にして、悠暢と、花

を見、鳥を聞きつゝ通る。……

怍る趣を知つたため、私は一頃は小遣錢があると、東京

の町をふらくと俣で歩行く癖があつた。淺草でも、銀座でも、

上野でも——人の往來、店の構へ、千状萬態、一卷に道

中の繪ゑに織おり込んで——また内ない證しょうだが——大福だいふくか、金鍰きんつばを、豫かねて袂たもとに忍しのばせたのを、ひよいと食やる、其その早業はやわざ、太神だいかぐ樂らの鞠まりを凌しのぐ……誰たれも知るまい。……實じつは、一寸ちよつと下りて蕎麥そばにしたところい處ところだが、かけ一枚いちなんぞは刹那主義せつなしゆぎだ、泡沫夢幻ほうまつむげん、つるりと消きえる。俤くる代まだいを差引さしひくと其そのいづれかを選えらばねばならぬい懷ふとだから、其處そこで餡氣あんけで。金鍰きんつばは二錢にひやくで四個よんこあつた。四海しかい波靜なみうかにして俤くるの上まうへの花見はなみのつもり。いや何どうも話はなしにならぬ。が此この意氣いきを以もつてして少々せうくくめん工面くめんのいゝ連中れんちゆう、誰たれか自動車じどうしや……圓ゑんタクでも可いい。蕎麥そばを食くながら飛とばして見みないか。希こひくは駕籠かごを一いち挺ちやうならべて、かむろに搔餅かきもちを焼やかせながら、鈴鹿越すゞかごえをしたのであると、納まり返をさかへつたおらんだ西鶴さいかくを向むかうに、京か

みがたなりきん
 阪成金を壓倒するに足らうと思ふ。……

時に蕎麥と言へば——丁と——梨。——何だか三題噺のや

うだが、姑忘聽之。丁と云ふのは、嘗て（今も然うだらう

。）梨を食べると酔ふと言ふ。酔ふ奴があるものかと、皆が笑ふ

と、「酔ひますさ。」とぶつく言ふ。對手にしないと「僕は酔

ふと信ずるさ。」と頬を凹まして腹を立てた。

わかときのこと。いま。今では構ふまい、私と其の丁と二人で、宿場

でふられた。草加で雨に逢つたのではない。四谷の出はづれで、

ふたり。二人とも嫌はれたのである。

「おい。」

と丁が陰氣に怒つた。

「こんな堅い蕎麥が食はれるかい。場末だなあ。」

と、あはれや夕飯兼帯の臺の筧に箸を投げた。地ものだと、或はおとなしく黙つて居たらう。が、對手がばらぎだから堪らない。

「……蕎麥の堅いのは、うちたてさ、フ、ンだ。」

然うだ、うちたての蕎麥は、蕎麥の下品では斷じてない。胃

弱にして、うちたてをこなし得ないが故に、ぐちやり、ぐちや

りと、唾とともに、のびた蕎麥を噛むのは御勝手だが、その舌で、

時々作品の批評などすると聞く。——嚙うちたての蕎麥を

罵つて、梨に酔つてる事だらう。まだ其は勝手だが、斯の如き量

見^{けん}で、紅^{こう}葉^{えふ}先^{せん}生^{せい}の^{じん}人^{かく}格^を品^{ひん}評^{べう}し、意^い圖^とを^{そん}忖^{たく}度^{して}

憚^{はざ}らないのは僭^{せん}越^{えつ}である。

私^{わたし}は怯^け懦^{ふだ}だ。衛^{ゑい}生^{せい}に威^{おど}かされて魚^さ軒^しを食^くはない。が、魚^さ軒^しは

推^す重^{ちゆう}する。その嫌^{きら}ひなのは先^{せん}生^{せい}の所^い謂^は蜩^{しづみ}が嫌^{きら}ひなのでは

なくて、蜩^{しづみ}に嫌^{きら}はれたものでなければならぬ。

麻^あを刈^かると題^{だい}したが、紡^{つむ}ぎ織^おり縫^ぬひもせぬ、これは浴^ゆ衣^{かた}がけの

縁^{えん}臺^{だい}話^{ばなし}。――

少^{すこ}し涼^{すず}しく成^なつた。

此^この暑^{あつ}さは何^どうです。……まだみんくも蟬^{ぜみ}も鳴^なきませぬね、と

云^いふうちに、今^{こと}年^{とし}は土^ど用^{よう}あけの前^{ぜん}日^{じつ}から遠^{とほ}くに聞^きこえた。カナ

くは土^ど用^{よう}あけて二^ふ日^{つか}の――大^{おほ}雨^{あめ}があつた――あの前^{まへ}の日^ひから

鳴き出した。

蒸暑いのが續くと、蟋蟀の聲が待遠い。……此邊で

は、毎年、春秋社の眞向うの石垣が一番早い。震災

前までは、大がい土用の三日四日めの宵から鳴きはじめてのが、

年々、やゝおくれる。……此の秋も遅かった。

それ、自動車が來たぜ、と婦まじりで、道幅が狭い、しば

く縁臺を立つのだが、俵は珍らしいほどである。これから、

相乗——と云ふ處を。……おゝ、銀河が見える——初夜す

ぎた。

大正十五年九月—十月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「時事新報 第一五五二九号～一五五四四号」時事新報社

1926（大正15）年9月23日～10月8日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「車夫」に対するルビの「くるまや」と「しやふ」と「わかいしゆ」、「船頭」に対するルビの「せんどう」と「おやぢ」の混

在は、底本の通りです。

※表題は底本では、「麻《あさ》を刈《か》る」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

麻を刈る

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>